

05-1 生活習慣の改善にう蝕リスク検査が効果的だった1症例

岩間美樹（松本歯科大学病院歯科衛生士室）、川原一郎（松本歯科大学大学院健康増進口腔科学講座）

キーワード：生活習慣改善、プラークコントロール、う蝕リスク検査

要旨：う蝕を多く発症させてしまう患者に対するプラークコントロール指導の難しさは、生活習慣変容へのモチベーションの維持にある。今回、口腔衛生指導の一環として、う蝕リスク検査として口腔内細菌を患者と指導者が共に観察する機会を設けたところ、患者にプラークコントロールの重要性を高いレベルで理解させることができた。その結果、う蝕原因菌量の低減効果は、指導から6か月後も継続し、長期間にわたるモチベーションの維持が見られた。口腔衛生指導におけるう蝕リスク検査は、患者のモチベーションの向上にも顕著な効果があることが示された。

A. 目的

う蝕多発者は、プラークコントロールとして生活習慣変容やモチベーションの維持が困難であることが多く¹⁾、長期的には十分なう蝕抑止効果が得られない^{2,3)}。今回、う蝕リスクに対する具体的な指導を行い、またう蝕原因菌（SM菌）の減少効果を視覚的に示すことで、プラークコントロールの効果維持が見られた1症例を報告する。

B. 症例・方法

26歳女性。う蝕を主訴に本学病院歯科保存科を受診した。

上下左右の小白歯、大白歯隣接面に複数の隣接面う蝕を認めた。2020年3月に初回検査として、O' LearyのPCR、唾液検査（SMT, Dentocult SM）、食生活調査、CAMBRA）を実施した。2021年4月にう蝕治療が完了し、続いて2回目の検査（O' LearyのPCR、Dentocult SM）、とプラーク位相差顕微鏡の確認およびブラッシング指導、生活習慣指導を開始した。2021年11月に3回目の検査（O' LearyのPCR、Dentocult SM）を実施した。

C. 結果

【う蝕リスク検査の結果】

1回目検査においては、O' LearyのPCR値は48.2%、Dentocult SMはクラス2に分類され、高いう蝕リスク評価となった。2回目の検査においては、O' LearyのPCR値は36.6%、Dentocult

SMはクラス1となった。3回目検査においては、O' LearyのPCR値は26.8%、Dentocult SMはクラス0となった。

【口腔衛生指導と経過】

3日間の食生活調査では、食事リズム、ブラッシングタイミングに問題点は認められなかったため、口腔衛生指導はプラークの除去に重点をおいた。プラークの染め出しでは、隣接面の陽性部分が多く認められたことから、ヘッドの小さなブラシとデンタルフロスの使い方を指導した。また、クロルヘキシジン含嗽剤の使用を指示した。また、位相差顕微鏡を用いて、患者本人のプラーク細菌の形や動きと、Dentocult SMの唾液内浮遊細菌のコロニーを患者が自ら目視で確認した。

D. 考察

本症例では、初回検査での高いう蝕リスクとSM菌レベルに対するプラークコントロールの結果、SM菌レベルの減少効果が確認され、6か月後も効果の継続が認められた。歯面清掃方法の具体的な指導と位相差顕微鏡、SM菌培養結果といった視覚素材を用いたプラークコントロールが、患者のモチベーションの維持に効果的であることが推察された。

E. まとめ

生活習慣としてのプラークコントロールの指導に、う蝕リスク検査結果の視覚素材の応用は、患者のモチベーションに大きな効果があること

がわかった。

F. 利益相反

利益相反なし。

G. 文献

- 1) 池野直人, 笹谷育郎, 高瀬俊博, 藤井敦子, 石川純: ブラッシング指導におけるモチベーションの効果について. 日歯周誌 21:193-200. 1979.
- 2) 橋田康子, 山本静, 磯崎亜希子, 世川晶子, 渡部亜記, 野中哲雄: 6日間で極める! 磨ける・伝わる ブラッシング指導. 81-84. クインテッセンス出版. 2012.
- 3) 平岩弘, 森田学, 渡邊達夫: 歯周病患者における口内法による刷掃指導と位相差顕微鏡を用いての患者教育の効果. 日歯周誌 27:602-609. 1985.